

# むすび+

プラス

## ともに育ち 学びあう活動—実践編

委員会をはじめ、年間を通して活動する組合員を「むすび」ます。活動の紹介、情報発信の場をめざします！

### 「お米の出前授業」を地域で開催中

～産直産地と地域の協力で実現～



2010年、「バケツ稲」の提供をきっかけに、小学校からの相談ではじまった「お米の出前授業」。苗植えから稲刈り、脱穀、<sup>もみす</sup> 糺りを体験し、お米について学べると人気です。今では、東京都の小学校の1割以上が利用するまでになりました。都内の小学校で広がるパルシステム東京の「お米の出前授業」を紹介します。

#### ◆学校に定着した「お米の出前授業」

毎年、150を超える小学校が、5年生社会科の稲作学習の一環としてパルシステム東京の「お米の出前授業」を利用しています。前年度の5年生担任教師が次の年度の担任に紹介するなど、各校で定着しています。

練馬区立上石神井小学校もそんな学校のひとつ。コロナ禍にも関わらず、今年度の5年生も校内で苗を植え、栽培・収穫する米作り体験に取り組みました。12月4日には、練馬センターの活動長が、お米についての授業と糺り作業の指導を行いました。

#### ◆生産者への感謝もしっかりと伝えました

4月に活動長になったこともあり、今回が講師デビューの亀井活動長。最初は緊張気味でしたが、「稲1本には何粒のお米がついているか知っている？」など、事前に用意したお米クイズで児童の心をグッとつかみます。

次は、校庭で育てた稲とパルシステムの産直産地の



◀「ごはんの食べ方にはいろいろあるけど、何が好き？」の質問に、「カレーライス！」「どんぶりが好き！」と、次々に答える児童たち。「パンはパンとしてだけで、アレンジは少ないよね。でも、ごはんはたくさんバリエーションがあるね」に、児童たちもうなずきながら聞いていました



◀すり鉢に籾を入れ軟式野球ボールで摺る作業に取り組む児童たち

稲を見比べます。「2本の稲についている籾は、数も大きさも全然違う。僕たちも大変だったけど、農家さんはスゴイ」の発言を引き出し、生産者の苦勞を伝えることにつながりました。

#### ◆「たべる」と「つくる」のつながりも

そして授業は糺り体験に。友だちに籾殻がかからないようにと校庭に散らばり、おしゃべりナシでみんな熱中していました。摺り終わった玄米はほんのわずかでも、「白米といっしょに炊いてもらう！」と満足そうに話す児童たち。「食べるときには感謝しながら食べましょう」と、活動長からは食の大切さを訴えました。

裏面に続く⇒

#### ▼亀井活動長(練馬センター)

「昔の人は稲に害を与えるイナゴをおいしく食べていたんだよ」など、お米についての情報を次々に話す活動長。今回が初めてとは思えないほどのお米トークに、児童たちも夢中で耳を傾けました。



「お米の出前授業は、生産者さんの思いを伝えられるいい機会。パルシステム東京と配達地域をつなげる機会でもあるので、これからもがんばります」(写真右はじ)  
(12月4日、上石神井小学校にて)

## ◆はじめりは地域への貢献

「バケツ稲」を配送センターが近隣の小学校に贈呈するところから始まったのが「お米の出前授業」です。2010年、江戸川区の小学校で初の出前授業が開催され、2012年にはパルシステム東京全体の取り組みに発展しました。

当時の江戸川センター長（現・産直推進課）で、出前授業開催に携わった木方課長は「配送センターと地域をつなげたいという思いから、何か地域のみなさんの役に立つことができないだろうか…。当初は、低学年や幼稚園などの授業もありましたが、5年生の社会科で稲作を学ぶということを知り、それに合わせたカリキュラムにしたところ、多くの小学校から声をかけていただくようになりました」と話します。

関連会社で製造した有機質肥料で、化学物質無添加。食の安全を同時に伝えています。

## ◆「お米の出前授業」を未来へつなごう

今年度、コロナ禍で緊急事態宣言発令に伴う一斉休校のため、前期の苗植え授業はすべて中止に。3月時点で準備した苗は希望する学校へテキスト・肥料とともに届けました。後期の「脱穀・粳摺り授業」は80校から申し込みがあり、10～12月にかけて授業を行いました。マスク着用はもちろん、人数が多い学校では密を避け校庭で授業をすることもあったそうです。

2021年度の前期は4月から、後期は9月から募集を開始します。農業に触れる機会の少ない小学生に、パルシステム東京の「お米の出前授業」とおして、米作りに触れてもらう。日本の食文化を未来を担っていく子どもたちに伝えるためにも、「お米の出前授業」

使用する苗や稲はもちろん産直産地のもの。収穫時の天候不順などが重なると、生育が間に合わないかとハラハラすることもあります。

産地の状況と授業の時期に合わせての調整では産地のみなさんの協力があることです。“今日のお米は山形から来ましたよ”など、必ずどこから来たかをお知らせし、産地を身近に感じてもらえるようにしています。また、子どもたちの感想は産地に送るなど、顔の見える産直を心がけているそうです。

## ◆肥料は有機肥料を使用

肥料にもこだわっています。パルシステムグループの